吳越と閩との関係

——閩國の内亂を中心として——

田中整治

まえがき

吳越は唐の昭宗の乾寧二年（八九五）に鎮海鎮東軍節度使に任ぜられた錢鏐が、後梁の太祖の開平元年（九〇七）五月に吳越王に封ぜられてから、孫の錢俶のとき宋の太宗の太平興國三年（九七八）五月に滅びるまで五世七十二年命脈を保ち、[1]その領域は兩浙の地方十三州を占め[2]國都を杭州に奠めた國であり、閩は唐の昭宗の景福元年（八九二）に福州觀察使に任ぜられた王潮の季弟王審知が、後梁の太祖の開平三年（九〇九）四月、閩王に封ぜられてから、その子王延政が後晉の出帝の開運二年（九四五）八月、南唐の李璟の兵のために建州において滅ぼされるまで六主三十七年存續し、[3]その領域は閩中五州[4]を含み、首都を福州に奠めた國である。

吳越と閩とを比較すれば吳越が閩より強國であった。これは吳越が十三州を有し、米の産地を擁し、物資の豐富な上に海外貿易を奬勵して利益を擧げ、自衞のために不相應な軍備を整えたのに對し、閩國は五州を有するのみで、その土地は磽确であり物資は最も貧弱で僅かに外國貿易により財政を支えていたことにより察せられよう。[5]

五代史記卷六十職方考に次の如く見えている。

	梁	唐	晉	漢	周
建州	閩	閩	南唐	南唐	南唐
汀州	閩	閩	南唐	南唐	南唐
漳州	閩	閩	南唐留從効	南唐留從効	南唐留從効
泉州	閩	閩	南唐留從効	南唐留從効	南唐留從効
福州	閩威武	閩	吳越	吳越	吳越

これは建・汀・漳・泉・福の五州が五代の王朝のとき何國に屬していたかを示す表であるが、建・汀・漳・泉・福の五州は大體後梁・後唐のときには、閩の領有するところであったが、後晉のとき、建・汀・漳・泉の四州は南唐に屬し、福州は吳越に屬したことを示している。これを正確に述べると、閩の福州を除く四州は後晉の出帝の開運二年（九四五）八月、建州の王延政が南唐に降伏して南唐領となり、福州のみは、閩が南唐に滅ぼされた翌々年卽ち、後漢の高祖の天福十二年（九四七）十二月威武節度使李孺贇（李達）が吳越の戍將鮑修讓に殺され、吳越の領州となったのである。

閩は王審知の在世中は常に節儉を旨とし、良吏を選任し、刑罰を寛くし費用を省き、徭役を輕くし聚斂を薄くし、民に休息を與えて、民政によろしきを得たので、三十年間、國內平和を樂しんだが、後唐の莊宗の同光三年（九二五）十二月審知が死んで長子の延翰が嗣いだ。延翰のとき弟の泉州刺史延鈞と建州刺史延禀の亂が起り、延翰が殺され延鈞が立って鏻と改名した。鏻のとき國用が不足を告げたため、國計使薛文傑が民間の陰事を視察し、富豪の罪を搜し求めてその資產を籍沒し、國用をたすけたため閩人の怨を買った。鏻は後唐の廢帝の清泰元年（九三四）殺されて繼鵬が立ったが、かれは鏻の長子で昶と改名した。かれのとき空名の堂牒を以て官を賣ったこともあった。またかれの親衞隊たる宸衞都の兵士の賜予給賞を他軍の兵士より厚くしたために、控鶴都將連重遇、拱宸都將朱文進らの激怒を買い、昶はかれらの兵士のために宮殿と南宮を焚かれて、子弟らとともに奔って梧桐嶺に至った。重遇らは審知の少子延羲[6]を迎えて立てたが、昶は繼

業のために殺された。延羲は曦と改名するが、曦のとき弟の延政との反目により、これが内亂に發展し、閩の衰運を招くのである。閩の内亂が吳越・南唐との交渉をもつに至り、軍事力の劣弱なために閩は間もなく滅亡するのである。

本小論においては、國境線の連なっている北の吳越と南の閩との經濟的軍事的政治的關係を閩國の内亂を中心として述べてみたい。

一　吳越と閩との通商

閩國内の開發が進み[7]、通商の發達を圖った王審知のとき、即ち後梁の末帝の貞明二年（九一六）吳越では資治通鑑卷二六九に

吳越牙内先鋒都指揮使錢傳珦。逆婦於閩。自是閩與吳越通好。（後梁均王紀貞明二年）

とあるように閩室と通婚したので[8]、閩では吳越と友好關係を結んだが、これは兩國の通商を盛んにするための政略結婚であろう。

閩と吳越とが通婚して友好關係を結び、その後相互の通商が盛んに行なわれたようであるが、吳越の二代目の王、元瓘のとき、即ち通婚が行なわれて二十四年後、閩の王延政より吳越に對して救援軍の要請がなされ、新たな關係が生ずるようになる。その事情は後述するが、それに先立つ八年前に閩王審知の養子王延禀の二子の吳越への亡命について記るそう。

二　王繼昇・繼倫の吳越への亡命

後唐の明宗の長興二年（九三一）八月、建州の王繼昇、繼倫兄弟が父延禀の死を聞き、難を避けて吳越に奔り亡命した。[9]その經緯は次の通りである。兄弟の父王延禀は、閩王審知の養子で審知のときよりその長子の延翰と不仲であった。[10]審知が後唐の莊宗の同光三年（九二五）在位十七年で死んで長子の延翰が位を嗣ぐと、弟の延鈞を泉州刺史とし、延禀を

建州刺史とした。延鈞はこれを悅ばず、延禀もまた延翰を恨み、二人は亂を起そうと謀り、共に兵を擧げて福州を攻め、延翰を殺して延鈞が位に卽いた。延禀は建州に歸ろうとし出發の際に延鈞に對し、先人の基業をよく繼いで自分を再び來させることのないように告げた。延鈞はこれを聞き恨みを抱いて、延禀を殺そうとし、詐って延鈞が病死したと軍吏に命じて延禀に告げさせ、延禀を迎えにやらせた。このとき延禀は既に引退しており、その子繼雄が節度使となっていたが、軍吏は繼雄を囚え、延禀を執えて福州に歸った。延鈞は延禀に果して老兄を煩わして再び來させたと嫌味を述べた。延禀はかれを直視して殺された。かれの子の繼昇・繼倫は難の身邊に及ぶのを恐れて建州より吳越の錢塘に奔った。

三　曦・延政爭い、延政、吳越に救援軍を要請

閩の五代目の王曦が自ら威武節度使・閩國王と稱したのは後晉の高祖の天福四年（九三九）閏七月で[11]かれは後晉に表を奉り、翌年十一月高祖から閩國王に進封された。[12]かれは審知の二十八子といわれる。[13]閩王曦が弟延政と不和となった事情については資治通鑑（卷二八二晉天福五年二月）に

閩王曦既に立ち驕淫苛虐なり、宗族を猜忌し多く舊怨を尋ぬるや、その弟建州刺史延政數書を以てこれを諫む。曦怒り、復書してこれを罵り、親吏業翹を遣わし、建州軍を監し、教練使杜漢崇に南鎭軍を監せしむ。二人爭いて延政の陰事を摘め曦に告ぐ。これより兄弟積しく相猜恨す

とあるように、王延政よりその苛虐な行動を諫められた閩王曦は怒り、返書して延政を罵り、業翹を派遣し建州軍を監せしめ、杜漢崇（閩世家は杜建崇）に福・建二州の境界に置かれた交通の要衝にある南鎭軍を監せしめ、二人が王延政の密事を搜し集めて逐一曦に報告したことから、兄弟互に憎惡の念が募るばかりであったことが知られる。

業翹が赴任し延政と事を議し意見が一致せず、業翹から反亂を起すのかとどなりつけられた延政が怒って翹を斬ろうとした一こまもあって、翹は南鎭軍に奔るに至った。そこで延政は兵を發してこれを攻め、その戍兵を破ったので、翹・漢

崇らは福州に奔った。かくして西鄙の戍兵は悉く潰えたのである。これを知った閩王曦は統軍使潘師逵・吳行眞に四萬の兵を率いて延政を擊たせることにしたが、師逵は建州城の西に軍を駐し、行眞は城南に軍を駐し、閩江の上流建溪を隔てて宿營を配置し、建州城外の廬舍を焚くに至った。

形勢不利と見て延政は救援軍を北方の吳越に請うことになったが、時に後晉の高祖の天福五年（九四〇）二月のことである。吳越の王は錢鏐の後を嗣いだ元瓘であり、かれは寧國節度使・同平章事仰仁詮・內都監使薛萬忠に四萬の兵を率いて建州の救援に赴かせた。このとき丞相林鼎は閩への出兵の不可なることを諫めたが聞きいれられなかった。[14]

三月になり曦將の潘師逵は三千の兵を分けて都軍使蔡弘裔に率いさせ出戰させたので、延政は林漢徹らを派遣して、建州の東二十五里にある茶山（鳳凰山の別名、福建省建甌縣東北二十五里）に敵を破り、斬首千餘級の戰果を得た。このとき王延政の募集に應じた千餘人の決死隊は、夜河を涉り、潘師逵の壘に潛入し、風を利用して火を放たせたが、同時に建州城からも鼓譟してこれに呼應した。敵は延政の決死隊の奇襲を受け、師逵は戰棹都頭陳誨に殺されその兵は四散した。翌日延政の決死隊が吳行眞を攻めようとしたので、まだ延政軍が河を涉らないうちに、行眞とその兵士は宿營を放棄して逃走した。このとき、行眞軍には萬人を數える死者を出したが、延政は勝ちに乘じて永平（福建省武平縣北六十里）順昌（福建省順昌縣）の二城を奪取した。このときから延政軍の兵力が始めて強くなったという。

四月に入ってさきに吳越王の派遣した仰仁詮らの率いる四萬の兵がようやく建州に到達したが、前述の如く王延政は閩王曦の派遣した潘師逵らの兵を既に敗退させていたので、牛酒を奉って吳越軍を犒うとともに撤兵を請うたのである。しかし仁詮らはこれに從わず、建州城の西北に陣營を定めた。延政は仁詮が城に接近して駐屯するのをみて、かれに建州を圖らんとする意向があろうと考えて、これを恐れたので、また使を福州の閩王曦の許に遣わして吳越軍を擊退させるための救援軍を請うた。

かくて閩王曦は從子の泉州刺史王繼業を行軍都統に任命し、二萬の兵を率いて延政を救わしめた。また書を移して、吳

越が閩の建州を奪取せんとするの不當を責めるとともに、輕裝備の兵を遣わし吳越軍の兵糧補給路を遮斷せしめた。たまたま長雨のため建州に駐屯する吳越軍の兵糧が盡きたことを知った延政が、五月になって兵を出して攻擊をかけ、大いにこれを破り、俘斬は萬單位で計る戰果を收めた。かくて仁詮らの吳越軍は夜遁走した。[15]

要するに閩王曦と弟の延政との反目に端を發した吳越軍の延政への救援軍は、曦軍の敗退の後も依然として建州に留まったので、延政は吳越軍に建州を圖らんとする意向があると見拔き、閩王曦に救援軍を請い、その救援により吳越軍を敗走せしめて危難を免がれた。

四　閩王曦と王延政との抗爭

吳越軍が建州より敗退ののち、間もなく南唐主李昪が客省使尙全恭を閩王曦の許に遣わした。尙全恭の使命は閩王曦に對し王延政との爭いをやめて和睦を結ぶよう勸告するものであった。[16]

六月になると南唐主の勸告が功を奏して王延政の使が福州に赴いた。資治通鑑卷二八二に

延政、牙將および女奴を遣わし、誓書および香爐を持ち、福州に至り、曦と宣陵（父審知の墓）に盟わしむ（後晉高祖紀天福五年六月）。

とあるのによって、曦・延政兄弟が父王審知の墓前で和睦の誓いを立てたのを知るが、これは一時的なことで、兄弟相互の猜恨は容易に融けず、間もなく閩王曦は福州城の西郭を築いて延政の兵の來襲に備えた。

十月に入り閩王曦は商人に託して表を高祖に奉り自ら國內を統治したが、翌月甲申、後晉より威武軍節度使兼中書令に任命され閩國王に封ぜられた。[17]

一方延政の側ではどうかというと、翌年正月、周圍二十里の建州城を築き、福州の曦の來襲に備えると共に、曦に對して建州を威武軍に昇格させ、自らその節度使に任ぜられんことを請うたが、威武軍は福州にあるためその要請はききいれられなかった。延政の要請をしりぞけた曦はそのままにもしておけず、建州を鎭安軍に昇格させ、延政をその節度使とし

て富沙王に封じた。しかし延政は鎮安を鎮武に改稱した。延政が曦の措置に飽くまでも反對であって、その意向に一致點の見出せないことがわかる。

四月、閩王曦はその子亞澄を同平章事となし、かれに六軍諸衞を判せしめたが、このころ曦は弟の汀州刺史延喜が延政と通謀しているのではないかと疑惑を抱いた。これは汀州が建州と接壤しているためであろうが、早速曦は將軍許仁欽に三千の兵を率いて汀州に赴かせ刺史延喜を執えて福州に歸らせた。

延喜逮捕の翌々月、王延政が泉州刺史王繼業を招くための書を送った旨を聞いた曦は、二人が徒黨を組んだものと邪推したのであろう。曦は直ちに繼業を福州に召還して郊外において死を賜い、かつその子を泉州にて殺した。また繼業が汀州刺史のとき士曹參軍楊沂豐が、かれと親密なため、或る人が繼業と沂豐との通謀を告げたことにより沂豐が處刑されたこともあった。この事件より、閩室の宗族・勳舊は相繼いで誅せられたため、人心不安であった。このころたまりかねた諫議大夫黃峻は櫬(ひつぎ)をかついで朝堂に至り極諫したが、曦から老物狂發したと罵しられて漳州司戶に貶せられた。[18]

曦は淫侈で節度がなくそのために財政窮乏を告げたので、陳匡範・黃紹頗を國計使に任じて救濟策をはからしめた。先に國計使になった陳匡範は毎日萬金を進上せんと請い、禮部侍郎を授けられた。かれは商賈に數倍の增算を行ない、曦の覺えも目出たかったが、間もなく商賈の算が不足し、日進は諸省務錢を借用して補足した。このことが發覺し、匡範は憂悸して死んだ。曦は匡範の財政上の功績を賞讃してかれへの祭贈を甚だ厚くしたが、諸省務より匡範の貸帖卽ち借用帳簿を見せられ、大いに怒って棺を斲(き)り、その屍を斷って水中に棄てた。陳匡範の次に國計使になったのは黃紹頗である。かれは閩の官吏となる者は蔭補でない限り、皆錢を輸して官職を授けられるように建言した。それはその人の資望卽ち身分・家柄と世間の評判の高下および州縣戶の多少を考慮してその額を定め、百緡より千緡までの等級をつけたいという策である。これが採用された。[19] この賣官の策の成否については史料がないため明白ではないが、ある程度成功したのであろう。

閩王曦が大閩皇と自稱したのは七月のことであるが、これはかれに最早敵意を抱く宗族・勳舊がいなくなって、かれが

延政に對抗するためにとった措置であろう。かれは依然として威武節度使を領し、王延政とともに兵を治めて抗爭を繰返し互に勝敗があった。このために福州より建州に至る地方は「暴骨如レ莽」といわれるように荒廢の狀を呈した。これをみた鎭武節度判官潘承祐は戰鬪を終熄させて、閩王曦と好みを通ぜんことを延政に請うたが、聞きいれられなかった。恐らく延政に閩國王たらんとする野心があったからであろう。閩王の使者が建州に來たとき、延政は大いに甲卒を並べてその威力を誇示し、使者に對する語辭が甚だ悖慢であったという。このため承祐が長跪して切諫したが、却って延政を憤らすにすぎなかった。

一方閩王曦の方では、泉州刺史王繼嚴が州民の心を掴んでいるのを知り、これを憎み罷免して福州に召還した後酖殺した。[21]

間もなく閩王曦の子亞澄は威武節度使兼中書令となったが、[22]閩王曦は十月、皇帝の位に卽いた。これと對抗するかの如く、建州の王延政は兵馬元帥を自稱した。[23]

天福七年（九四二）正月、閩王曦は同平章事李眞の女を皇后に立てた。彼女は酒を嗜み剛愎であったが、曦の寵愛を受け憚られたという。[24]

富沙王延政が行動を開始して汀州を包圍したのはその年の六月であったが、閩王曦の側では、漳・泉二州の兵五千を發して救援に赴かせ、またその將林守亮・廣敬忠を派遣し、敵の虛を衝いて建州を襲わんとし、閩の國計使黃紹頗は八千の兵を率いて林・廣二軍に對して聲援を行なった。翌月、延政は愈々汀州城を攻擊して四十二回戰鬪を交え、勝利を收めないで歸ったが、このとき延政側の水軍を率いた包洪實、陳望らは福州の軍を防禦した。曦・延政の軍は尤口（尤溪口）にて遭遇し、閩の遣わした廣敬忠は占者が行動を起すなと助言したためそれに從い、延政軍は戰線の展開が有利となり、洪實らは兵を率いて岸に登り、水陸兩方面より敵を夾攻し、曦軍の側に俘斬二千級の損害を出した。かくて林守亮・黃紹頗らは皆福州に遁げ歸った。[25]

八月、閩王曦は建州の王延政の許に使節を派遣した。これは資治通鑑巻二八三に、

閩主曦、使を遣わし手詔および金器九百・錢萬緡・將吏敕告六百四十通を以て和を富沙王延政に求めしむ（後晉高祖天福七年八月）

とあるのによってわかるように、閩王曦が延政との間に和睦をはからんとする目的のものであった。曦が延政に和睦を求めたのは、間接的には、長期間にわたり閩國内において兄弟が抗争を繰返すことの不利であること、また財政上の理由からであろうが、直接的には、建州の王延政の兵力に太刀打ちできないことを認めたためであろう。しかし延政はこれに應じなかった。恐らくかれに閩國を支配せんとする野心があったからであろう。

天福八年（九四三）二月、延政は建州において帝を稱し、國を大殷と號して大赦を行ない、天德と改元し、將樂縣（福建省將樂縣）を鏞州となし、延平鎮（福建省南平縣）を鐔州に昇格させ、皇后張氏を立て、また節度判官潘承祐を吏部尚書に、節度巡官楊思恭を兵部尚書に任じ、間もなく承祐を同平章事に、思恭を僕射にして軍事を統べしめた。[33]

延政の建てた殷國は領土が狹く人民は貧困である上に、福州の曦との抗爭がやまず、軍事費が嵩んで苦しんだが、このとき巧妙に聚斂につとめて延政の信任を得たのは楊思恭である。かれは田畝山澤の税を增徵するとともに、魚鹽蔬果についても倍征して誅求に努めた。殷國人民から楊剝皮とよばれる所以である。[34]

延政が殷國を建てて二か月ののち、殷將陳望らが福州を攻め、その西郛に入ったが敗退した。その翌月、殷の吏部尚書・同平章事潘承祐が殷帝延政に上書し十か條にわたって延政の弊政を述べ、その冒頭に兄弟の抗爭は天理に逆うと諫めたことなどにより、延政の怒りに觸れてその官爵を剝奪された。[35]

南唐では李昪が天福八年二月病死して長子の李璟が嗣いだが、かれが使節を閩王曦と殷王延政とに遣わし、書を送り、兄弟の抗爭を責めたのは翌年正月のことである。曦はこれに對して、復書して、これは周の武王の弟周公旦が管叔・蔡叔兄弟を誅し、唐の太宗李世民が建成・元吉兄弟を誅したことに比較されるべきことで、何ら責められるべき筋合いのもので

ないと反論するところがあり、また延政も復書して、南唐の李昇が楊行密の建てた吳國を簒奪したのを斥けたため、南唐主は憤って遂に延政と交際を絶つに至った。しかし閩王曦とは國交を絶つに至らなかったようである。[29]

五　朱文進、曦を殺して位に卽き、李仁達、卓巖明を位に卽く

閩の拱宸都指揮使朱文進・閤門使連重遇らは天福四年（九三九）に閩王繼鵬を弑したため、閩人から討たれはしまいかと常に恐れ、相互に通婚して團結していた。閩王曦は誅殺にあたっては果斷で、西園において酒醉のため朱文進の一味魏從朗を殺したこともあり、また酒酣のとき、文進・重遇に酒をすすめて白居易の詩を誦し兩人の內心を確めて、大いに二人を恐れさしたという。

たまたま尙賢妃が閩王曦の寵を受けていると知って嫉妬した李后が、閩王を弑してその子亞澄を立てようとし、使を文進・重遇の許にやって、主上と二公との不和の理由を尋ねさせたこともあった。李后の父李眞が病床に臥し、曦が李眞をその邸宅に見舞った際、文進・重遇は拱宸馬步使錢達に命じ曦を馬上において弑せしめた。時に後晉の出帝の天福九年（九四四）三月のことである。文進らは百官を朝堂に集めて曦の次には有德者を擇んで立てよと告げ、重遇が文進を推して殿に昇らせ、衮冕を被らせ、群臣を率いて北面し再拜して臣と稱した。

かくて朱文進は閩王を自稱したが、王氏の宗族延喜以下五十餘人を捕えて悉く殺し後顧の憂を絶った。重遇は六軍を統べることになった。このとき朱文進に抗辯して屈しなかった禮部尙書・判三司鄭元弼は黜けられ、建州の延政の許に奔らんとして文進に殺された。閩王の位に卽いた文進は令を下して後宮の宮女を出し、營造を罷めて曦の時代の政治を改めた。このころ殷王の延政は統軍使吳成義に命じて兵を率い文進を討たせたが勝利を收めなかった。文進は樞密使鮑思潤に同平章事を加え、羽林統軍使黃紹頗を泉州刺史に、左軍使程文緯を漳州刺使に任命した。曦のとき汀州刺史となった許文稹は郡を擧げて文進に降伏した。[30]

朱文進が位に卽き間もなく使を南唐の國都金陵に派遣したことは、馬氏南唐書卷二に、

夏閩人朱文進・連重遇その君曦を弑す。重遇、文進を立て使來りて亂を告ぐ。その使を囚え、閩を伐たんことを議す。民疫を以て閩使を釋してこれを遣わさしむ。夏四月なり。（嗣主書保大二年）

また陸氏南唐書卷二に、

保大二年（九四四）夏五月、閩將朱文進その君曦を弑し、自ら閩王を稱す。使を遣わして來り告ぐ。帝その使を囚え將にこれを討たんとす。議者謂えらく「閩の亂は王延政に由る。當に先に討つべし」と。乃ち閩使を釋して遣わし還さしむ。（元宗本紀）

とあるのによって知られる。馬氏南唐書では、閩使を囚禁すると共に伐閩の師を起さんことを議したが、人民が疫病にかかっているため、閩使を釋放して國に歸還せしめた。時に四月であるとあり、陸氏南唐書では、南唐主が閩使を囚禁し、議したが王延政を先に討てということになり、閩使を釋放して歸國せしめた、[36] とある。

閩の朱文進が威武留後を自稱し、閩國事を權知したのはその年の八月であるが、かれは開封に遣使し表を奉り藩を後晉に稱したので、間もなく後晉の出帝より威武節度使を拜し、閩國事を知することになった。[37]

閩王曦が朱文進らに殺されてからの延政の動靜は如何といえば、十月になって殷王の延政はその將陳敬佺に三千の兵を率いて尤溪（福建省尤溪縣）・古田（福建省古田縣）に駐屯させ、また盧進に命じ二千の兵を率いて長溪（福建省霞浦縣）に駐屯せしめた。これは朱文進の攻擊に備えるものであろう。[38] このころ泉州散員指揮使留從效が同列の王忠順・董思安・張漢思らに文進を討つ決意を告げて、かれらの同意を得、翌月、從效らは各々軍中の壯士を引いて、夜從效の家で飲み、その席上、從效は壯士らに、延政が既に福州を平定し密旨を下して、我らに黃紹頗を討たしめたと僞り告げ黃紹頗の討伐を促したので、壯士らは皆勇躍して泉州城に入り、刺史黃紹頗を執えて斬り、從效は直ちに泉州刺史の印を持って、王繼勳の邸に至り、かれに軍府の主とならんことを請い、從效は自ら平賊統軍使と稱し、紹頗の首を箱詰にし、それを副兵馬使陳洪進に持たせて建州に至

らしめた。途中洪進が尤溪に至ったとき、福州の戍兵數千に道を遮られたが、洪進は僞って福州の朱文進を誅し延政を建州に迎えに行くと告げ、紹頗の首を示して戍兵を四散させた。このとき戍兵の大將數人は洪進に隨行して建州に至った。

かくて延政は繼勳を侍中・泉州刺史とし、從效・忠順・思安・洪進を皆都指揮使に任命した。漳州の將、程謨はこれを聞いて直ちに刺史程文緯を殺し、王繼成に州事を權知させた。泉州刺史王繼勳・權知漳州事王繼成は延政の從子であるが、朱文進が曦を滅ぼしたとき、この二人は曦とは疏遠のため命を全うすることができたものである。このとき汀州刺史許文稹は表を奉って殷王の延政に降らんことを請うた。かくして泉・漳・汀三州が建州の延政の支配下に入った。十二月、朱文進は後晉より同平章事を加えられ、閩國王に封ぜられた。[33]

朱文進は泉州刺史黃紹頗が留從效らに殺されたのを知り大いに恐れ、重賞を與える條件で二萬の兵を募り、統軍使林守諒・內客省使李廷鍔にこれを率いて泉州の王繼勳を攻めさせた。このとき殷王延政は大將軍杜進に二萬の兵を率いて泉州を救わせたが、留從效は泉州城の城門を開いて福州の兵と戰い、敵を大いに破り、敵將守諒を斬り、廷鍔を執えた。延政は統軍使吳成義に戰艦千艘を率いて福州の朱文進を攻めさせたが、このとき朱文進は子弟を吳越に人質として送り、その救援を求めた。[34]

ところでこのころ南唐の方では如何に閩に對處したかというと、

十有二月、馮延己、翰林學士承旨・水部員外郎となり、馮延魯、中書舍人となる。延魯、功名に鋭し、建州の役を興さんと欲す。乃ち中書舍人查文徽を贊めて江西安撫使となす。翰林待詔臧循なる者嘗て閩に賈し、山川の險易を具知し文徽のために、進兵の計を陳ぶ。文徽是に因りて閩を伐たんと請う。乃ち邊鎬に命じ洪州の屯兵を率い、文徽と俱に行かしめ遂に建陽に入る。（馬氏南唐書卷二保大二年）

唐の翰林待詔臧循、樞密副使查文徽と鄉里を同じくす。循、常に賈人となり、福・建の山川に習い文徽のために建州を取るの策を畫す。文徽表して兵を用い王延政を擊たんことを請う。國人多く以て不可となす。唐主、文徽を以て江

西安撫使となし、境上に循行しその可否を覘わしむ。文徽、信州に至り、これを攻むれば必らず克たんと奏言す。唐主、洪州営屯都虞候邊鎬を以て行営招討諸軍都虞候となし、兵を將い文徽に従いて、殷を伐たしむ。文徽、建陽より進んで蓋竹に屯す。（資治通鑑巻二八四後晉齊王紀開運元年十二月）

とあるのによってもわかるように、商人出身の翰林待詔臧循が文徽のために建州を取る策を立て、文徽が出兵して王延政を撃たんと南唐主に請うたが、國人の多くが反對したので、文徽は江西安撫使となり境上に循行しその可否を伺い、行営招討諸軍都虞候邊鎬を従えて殷を討つため建陽（福建省建陽縣）より蓋竹（福建省建陽縣南二十五里）に屯したのである。

このとき文徽は泉・漳・汀の三州が皆殷に降り、殷將張漢卿が鏞州から八千の兵を率いて迫らんとするのを聞き、恐れて建陽に退き、臧循は邵武（福建省邵武縣）に屯した。邵武の民は殷の兵を誘導し循の軍を襲撃してこれを破り、循を執えて建州に送り、これを斬った。[36]

王延政は統軍使吳成義を派遣し遊兵を率いて福州境を巡視させ、福州の人民に、南唐が朱文進を討つため、我が軍を援ける大軍を到着させたと欺いて告げさせたので、福州の人民は益々恐れるに至った。[37]

間もなく朱文進は同平章事李光準らを遣わして國寶を殷の延政に奉らしめた。このころ福州の南廊承旨卽ち侍衛武臣の職にあった林仁翰がその一味三十人を率いて連重遇の邸宅に赴いたが、重遇の警戒が嚴重であったので三十人は遁去した。しかし仁翰は槊を執り直進して重遇を刺殺し、その首を斬り、重遇の兵にこれを見せ、文進を執えて贖罪せよと迫ったので、重遇らの兵は勇躍してこれに従い、遂に吳成義を迎えて入城し、重遇・文進の首を箱詰にして、建州の延政の許に送った。[38]

朱文進・連重遇が殺されたので、閩の故臣林仁翰らは殷王延政を福州に迎え、國號を閩と改めんことを請うた。時に後晉の出帝の開運二年（九四五）正月のことである。しかし延政は林仁翰の要請に従わなかった。福州にはまだ南唐の兵が壓境のままであり、延政が遷都する餘裕がなかったからである。そこで延政は自分の代理として從子の門下侍郎同平章事

繼昌を都督南都内外諸軍事に任命し、福州に鎮せしめ、飛捷指揮使黄仁諷を福州在城鎮遏使に任じ、兵を率いてこれを守らせた。[36]

林仁翰は福州から建州に至って王延政に見えたが、閩王のかれに對する論功行賞は甚だ薄かった。しかし仁翰はその功を口にしたことなく、福州侍衛の外、左右軍の軍士一萬五千を發して建州に至り南唐軍を防禦することになった。[37]

二月、南唐の査文徽が南唐主に上表して兵力の増強を求めたのに對し、[38]李璟は天威都虞候何敬洙を建州行營招討馬步都指揮使に、祖全恩を應援使に、姚鳳を都監にそれぞれ任命し、數千の兵を率いて建州に會合し、延政を攻略するため崇安(福建省崇安縣)より進んで赤嶺に屯せしめた。一方閩王の延政は僕射楊思恭・統軍使陳望を遣わし、一萬の兵を率いて南唐軍を防ぐため柵を閩江の上流建溪の南岸に並べさせたが、南唐の兵が迫らなかったので旬餘にわたって戰鬪はなかった。思恭は延政の命を受け陳望の戰鬪を監督したが、このとき陳望は萬全の策を構えて、攻擊は周到にやらねばならぬと愼重論を主張したのに對し、思恭は敵の戰鬪態勢の整わぬうちにと、先制攻擊論を强調したので、陳望はやむなく部下の兵を率いて河を渉り、南唐軍と戰った。南唐の全恩らは大軍を率いて陳望の前軍に當り、奇兵をその後方に出し、大いに陳望の軍を破った。

かくて陳望は戰死し、楊思恭は僅かに身を以て免れることができた。味方の敗戰を知った延政は大いに恐れ、餘兵を以て城を自守し、遂に董思安・王忠順を召し、泉州の兵馬千を率いて建州に至らしめ、要害を分守させた。[39]

ところで王延政が開運二年(九四五)正月、福州を掌中に收めるに至って、嘗て延政に仕えた李仁達・陳繼珣は内心不安であった。というのは、李仁達は光州(河南省横川縣)出身であるが、閩に仕えて元從指揮使となり、十五年間轉職しなかったが、曦の時代に叛して建州に奔り、延政の將となった。しかし朱文進が曦を殺すとまた叛して福州に奔り、建州を取る策を述べた。文進はかれが反覆常でないのを憎み、福清(福建省福清縣)に黜居させた。次に陳繼珣は浦城(福建省浦城縣)出身であるが、延政に叛し福州に奔り、曦の著作郎となり、曦のために建州を取る策を建言した人物であるからである。

王延政に代って福州に鎮した王繼昌が庸懦で部下を統御する才なく、酒を嗜み、將士をいつくしまなかったために、將士の怨みを買うに至ったが、仁達は福州に潛入して福州在城鎮遏使黄仁諷に繼昌を討つ旨を告げ、同意を得、その夕仁達らは甲士を引いて府舍に突入し、繼昌と吳成義を殺した。かくて仁達は自立せんとしたが、衆心が自分に服していないのを恐れて、雪峯寺（福州候官縣西百餘里）の僧卓巖明が衆に重んぜられているのに目をつけて、これを天子に推し迎えて帝となし、衲衣を解き去って袞冕を被せ將吏を率い北面してこれを拜し、なお天福十年（九四五）と稱し、遣使して表を奉り、藩を後晉に稱した。

王延政は、福州において繼昌らが殺されたのを聞き、黄仁諷の家族を殺し、統軍使張漢眞に五千の水軍を率いて、漳・泉二州の兵を併せて巖明を討たせた。[12]

張漢眞が福州に到着してその東關を攻撃したのは四月に入ってからであるが、このとき黄仁諷は家族の誅戮されたのを聞き、門を開いて力戰し、大いに閩の兵を破り、漢眞を執えて福州城に入りこれを斬った。

卓巖明には他の方策は何もなくただ殿上において水を噀（は）いて豆を散じ、諸法事をなすのみであった。かれはまた使を莆田（福建省莆田縣）に遣わして父を迎え、尊んで太上皇とした。李仁達は巖明を天子に立ててのち、自ら六軍諸衞事を判したが、黄仁諷・陳繼珣に命じてそれぞれ西・北門に屯せしめ、のち仁諷・繼珣の謀反を告げさせこれを殺した。かくて兵權が悉く仁達の掌中に歸した。[13]

李仁達が大いに戰士を閲し、卓巖明に請うて臨視し、密かに軍士に命じ突然進んで階を登り、巖明を刺殺させた。

このとき仁達は表面では僞って狼狽して走ったが、軍士らは仁達を執え、巖明の坐に据えた。

かくて仁達は威武留後を自稱し、南唐の李璟の保大の年號を用い、表を奉って藩を南唐に稱した。また中原の王朝後晉に遣使して入貢し、并せて巖明の父を殺した。南唐では李仁達を威武節度使・同平章事とし、弘義と名を賜い、これを屬籍に編入した。同姓のためである。弘義はまた使を遣わして吳越に修好した。これはかれが南唐に背いて吳越につかんと

するためであろう。[44]

六　王延政、吳越に臣を稱し、吳越に援軍を請う

間もなく南唐の兵が建州城を包圍し、屢泉州兵を破った。この泉州兵は董思安・王忠順が將に建州を救わんとして統率していた兵である。このころ許文稹は南唐の兵を汀州に破って、その將時厚卿を執えた。[45]

閩人の或る者が、王延政に福州よりきた援兵の謀反を告げたのは七月である。福州よりきた援兵とは、この年の正月、王延政の命により建州に赴き、南唐軍を防禦した南都侍衛および兩軍の兵士のことである。そこで王延政は叛亂軍の鎧仗を收容して、かれらをもとの駐屯地に遣還し、兵を險狹なる道路に伏せ盡くこれを殺した。このときの叛亂軍の死者は八千餘に達し、その肉を乾し肉とし、建州に歸って食用としたという。

このころ南唐の邊鎬は鐔州を拔いたが、査文徽の黨たる魏岑・馮延己・馮延魯は出兵し功績を立てるため、勇躍して出兵に贊成し供億を徵求した。このため南唐の府庫が耗竭したが、特に洪(江西省南昌縣)饒(江西省鄱陽縣)撫(江西省臨川縣)信(江西省上饒縣)四州の人民が最もこれに苦しんだ。

延政の方でも苦しくなったらしいが、延政は吳越に使を遣わし表を奉って臣と稱し、その附庸卽ち屬國とならんことを請い、南唐軍を擊退するための救援を求めたのである。[46]

これに對して吳越の方で救援軍を送った史料が、吳越備史卷三忠獻王弘佐開運二年の條を始めとして史書に見えないので、吳越では應じなかったのであろう。これはさきに元瓘のときに、延政の救援に赴いた吳越軍が、現地に到着とともに撤退を迫られ、結局これに應じないで擊退されたことを根にもったためかもしれない。

南唐軍による建州包圍が既に久しくなった八月、建州の人々は異心を抱くようになった。このとき董思安に早く去就を擇ぶべきであると勸告する者がいたが、思安は主家に最後まで忠節を盡す決意を述べたので、思安の言に感じて一人も叛

く者がなかった。丁亥、南唐の先鋒橋道使王建封が先登となり、遂に建州にて勝利を收めた。ここにおいて王延政は降伏した。[47] 王忠順は戰死したが、董思安は兵を整えて泉州に奔った。南唐の兵が建州に來襲した當初、建州の人々は王氏の亂と楊思恭の重税に苦しめられていたことでもあり、爭って木を伐り道を開いて南唐の兵を歡迎した。然るに南唐の兵が建州を破ってのちは、大いに掠奪を行ない官室廬舍を悉く焚き拂ったので、建州の人々の失望するところとなった。しかし南唐主は建州攻陷の功績を認めて南唐兵の掠奪焚拂いを不問に附した。[48]

閩の許文稹・王繼勳・王繼成がそれぞれ汀・泉・漳州を以て悉く南唐軍に降ったのは翌月のことである。[49]

かくて閩の建・汀・泉・漳の四州は、王潮が唐の昭宗の景福二年（八九三）に占有してより五十四年、王審知の建國より三十七年ののち南唐に屬するようになったのである。南唐では永安軍を建州に置いてこの地方を統治することになった。[50] 南唐軍に降伏した王延政は十月、南唐の國都金陵に至り、南唐主から羽林大將軍・安化軍節度使に任ぜられ鄱陽王に封ぜられた。百勝節度使王崇文が永安節度使に任ぜられたが、その統治は寛簡を旨としたので、建州の人々はようやく安堵するに至った。[51]

七　李達、吳越に師を乞い、吳越王弘佐これに應ず

建州において王延政を降したのち、南唐の府庫は耗し、民は命に堪えない狀態にあったので、南唐では福州の李弘義（李仁達）・泉州の留從效（劉從效）に對しては唯羈縻するのみであった。そこで南唐の諸將はこれを討たんことを請うたが許されなかった。[52] 時に開運三年（九四六）六月のことである。樞密使の陳覺が自ら赴いて李弘義に說かんことを請い、必らず弘義を金陵に入朝せしめんとした。このとき宋齊丘は覺が才辯ある人物であると南唐主に推薦し、かれは寸刃を煩わさないで坐して弘義を招くことができるとした。かくて南唐主は覺を福州宣諭使とし、弘義に金帛を厚賜したが、弘義にその謀を見破られ、弘義の辭色が甚だ倨り、覺に對する待遇が甚だ疎薄であった。このような事情で、覺は福州に來て

も弘義入朝の旨を告げないで金陵に還ることになった。[63]

かれは途中劍州卽ち王延政の置いた鐔州に至り、李弘義を入朝させる功績のないのを恥じ、詔を矯めて、侍衞官顧忠に命じ弘義を召して入朝させんとし、自らは權福州軍府事と稱し、擅ままに汀・建・撫・信四州の兵および戍卒を發して、建州監軍使馮延魯に命じ、これらの兵を率いて福州に赴き、弘義を迎えしめた。延魯は先ず弘義に書を送り、禍福を以て諭したので、弘義は復書して戰わんことを請い、樓船指揮使楊崇保を派遣し、州軍を率いてこれを禦がしめた。覺は劍州刺史陳誨を緣江戰棹指揮使とし、福州は孤立しているから、旦夕のうちに勝てると自信ありげに上表したが、南唐主は覺の專斷を怒った。しかし群臣の多くは、兵が既に福州城下に接近し攻略を中止できないので、當然兵を發してこれを助けさせよといい、丁丑、覺・延魯は楊崇保を候官(福建省閩侯縣)に破り、戊寅、勝ちに乘じ、進んで福州の西關を攻めた。このとき弘義が出擊して大いにこれを破り、南唐の左神威指揮使楊匡鄴を執えた。かくて南唐主は永安節度使王崇文を東南面都招討使とし、漳・泉安撫使・諫議大夫魏岑を東面監軍使とし、延魯を南面監軍使とし、兵を會同させて福州を攻めさせた。南唐軍はその外郭に勝ち、弘義は第二城を固守した。[64]

九月になって李弘義は威武留後を自稱し、南唐に叛いたので弘達と改名して表を奉り、命を後晉に請うた。甲午、後晉では弘達を威武節度使・同平章事・知閩國事に任命した。辛丑、福州排陳使馬捷が南唐の兵を引いて、馬牧山より寨を拔いて入り、善化門橋に至った。このとき都指揮使丁彥貞は百人の兵を以てこれを防禦した。弘達は退いて善化門を保ったが、[65]外城は再度皆南唐の兵の據るところとなった。弘達は達と改名したが、これは吳越王弘佐の諱を避けるためで、かれは吳越に使を遣わして表を奉り、臣と稱して吳越に援兵を請うた。[66]

十月に入って、南唐の漳州將であった林贇堯が叛亂を起し、監軍使周承義を殺した事件が發生した。この事件は劍州刺史陳誨・泉州刺史留從效が兵を擧げて贇堯を追放したので解決を見た。李璟は泉州裨將董思安に漳州の權知を命じ、次いで漳州刺史に任命した。思安は父の名が章であるため辭退したので、南唐主は漳州を南州と改めた。思安と從效に命じ

州兵を率いて福州に會して攻めしめ、庚辰これを包圍した。威武節度使李達の使者たる徐仁宴・李廷謂が救援軍を請うため、吳越の國都錢塘（杭州）に到着した。

李達の使を迎えた吳越王弘佐は諸將を召して救援軍を送るべきか否かを謀った。このとき諸將の壓倒的多數を占めた意見は、福州への道が險遠のため救援し難いとする消極策であったが、唯一人內都監使水丘昭券のみは當然救うべしとの積極策を主張した。弘佐は「脣亡齒寒。吾爲天下元帥。曾不能救鄰道。將安用之。諸君但樂飽食安坐邪」と述べ、水丘昭券の策に從うことになった。

壬午、吳越王弘佐は統軍使張筠・趙承泰に三萬の兵を率いて水陸より福州を救わせることになった。吳越が福州を救うときの經路は、本來なら婺（浙江省金華縣）・衢（浙江省衢縣內）州より建・劍州に至り、流に沿って福州に至るべきであるが、このとき劍・建州は既に南唐軍の掌中にあるため、この經路によることはできなかった。そこで溫州（浙江省永嘉縣）の平陽（浙江省桂陽縣）より海浦を渡って福州界に至る經路を通るべきであった。吳越では福州救援のための兵を募ったが、久しい間應募者がなかったので、弘佐が嚴重に督促して應募者が初めて雲集したという。弘佐は昭券に用兵を掌らせんとしたが、昭券はその時弘佐の寵任厚かった程昭悅を憚って、用兵はかれに譲りたいとの意向であった。しかし弘佐は昭悅に應援饋運の事を掌らせ、作戰の事は元德昭に委ねた。[29]

弘佐が鐵錢の鑄造を議し、將士の祿賜を增さんとしたのに對し、牙內都虞候弘億が鐵錢を鑄造する場合に八つの弊害があると諫めたために、弘佐はこれを中止した。[30]

十一月己酉、吳越の救援軍が福州に到達し、嶆（そう）浦の南より州城に潛入した。南唐の兵は進んで東武門に據ったので、李達は吳越の兵と共にこれを防いだが、形勢不利となり、これより城の內外の連絡が絕たれ、城中益々危うくなった。このとき南唐主は信州刺史王建封を遣わし、福州の攻略を助けさせた。王崇文が元帥となったが、陳覺・馮延魯・魏岑が爭って事を用い、留從效・王建封は倔彊で命を用いず、各々功を爭い、進退相應ぜず、これより南唐軍の將士は悉く團結しな

くなった。そのため城を攻めても勝利をえず、このころになって南唐の府庫も久しい用兵のために乏しくなってきた。[60]

後漢の高祖の天福十二年（九四七）三月、吳越ではまた水軍を發して餘安にこれを率いさせ、海道より福州に赴かせた。己亥、吳越の水軍は白蝦浦に到着した。その海岸は泥淖のため、竹簀を敷き並べて始めて進むことができる。しかし城南にいた南唐の兵は集って吳越の兵を射たため、吳越の兵は竹簀を敷くことができなかった。このとき南唐の馮延魯と裨將の孟堅との間に作戰について意見が一致しなかった。前者は吳越の兵を岸に登らせてのち殺す作戰を立てたのに、後者は吳越の兵が岸に登る前に殺す作戰を立てた。延魯は孟堅の策をきかず、相爭っているうちに吳越の兵は既に岸に登り、大呼して奮鬪したので、延魯はこれを防ぐことができず、兵を棄てて走った。孟堅は戰死したが、吳越の兵は勝ちに乘じて進み、城中の兵も亦これと呼應して出て南唐の兵を夾擊して大いにこれを破った。城南の南唐軍は遁走したので吳越軍が追跡した。このとき王崇文は三百の牙兵でこれを防ぎ、諸軍は崇文の後方に陣をとった。

敗走する敵を追跡した吳越軍は還ったので、或人は吳越の兵は錢塘に歸ろうとしていると述べ、東南の守將劉洪進らは、王建封に敵兵の盡く出るのを許してその城を取らんと建言した。留從效は福州の平定を欲しなかった。建封も亦陳覺らの專權を怒り、敗北を認めて劉洪進らの策に從わなかった。この夕陣營を燒いて遁げた。城北の諸軍も亦相顧みて潰えた。馮延魯は佩刀を引いて死のうとしたが、親吏に救われて果さなかった。南唐軍の死者は二萬餘を數え、軍資・器械數十萬を委棄したが、南唐の府庫はこれがために耗竭した。

吳越の餘安は兵を引いて福州に入り、李達は所部を擧げてこれに授けた。留從效は兵を引いて泉州に還り、南唐の戍將も兵を引いて歸った。南唐主は南唐の兵が新たに敗れ、自ら留從效を制することができないのを悟って、遂に從效に檢校太傅を加えてこれを安んじた。張筠・餘安らは皆錢塘に還ったが、吳越王弘佐は東南安撫使鮑修讓を遣わし兵を率いて福州を守らせた。[61]

六月、吳越王弘佐が年二十で死に弟弘倧が位を嗣いだが、その翌月李達はその弟通を以て福州留後となし、自ら錢塘に

至り吳越王弘倧に謁し、兼侍中を加えられ、孺贇と改名した。かれは錢塘に來たことを悔いかつ死を恐れて、內牙統軍使胡進思に賄賂を送り、福州に歸ることを求め、進思の計いで弘佐の許可を得て目的を達した。福州に歸った後の李孺贇は、吳越の戍將鮑修讓と協調せず、修讓を襲殺して再び福州を以て南唐に降伏せんと謀ったが、事前にこれが發覺し、修讓に殺された。李孺贇が後晉の出帝の開運二年（九四五）五月福州に據ってより二年餘後の天福十二年十二月のことである。かくて福州はこのときより吳越に所屬することになった。

あとがき

吳越と閩は五代の初に前後して建國し、後梁の末帝の貞明二年（九一六）、兩國の間に通婚がなされ、友好關係が保たれ、通商が營まれたようであるが、後唐の明宗の長興二年（九三一）八月、建州の王繼昇・繼倫兄弟が難を避けて吳越に奔って亡命する事件が發生した。閩の末頃卽ち五代目の王曦のとき、卽ち吳越の二代目の文穆王元瓘のとき、曦の弟延政が曦と不和となり、延政が吳越に救援軍を求めたのに對し、吳越はこれに應じて援兵を送り、現地に到着後、撤兵を求められてこれに應ぜず、結局擊退された。その後再び閩王曦と延政との抗爭があり、閩臣朱文進が曦を殺して位に卽き、次に卓巖明が李仁達に擁立されたが、永續せず、李仁達が兵權を掌握し、南唐より威武節度使に任ぜられた。曦が殺されて後の閩の支配者は建州の王延政であるが、かれは南唐に攻略されて、吳越に臣を稱して再び援軍を請うた。しかし王延政は目的を果さず、そのため延政の勢威振わず閩は滅亡した。時に後晉の出帝の開運二年（九四五）八月である。建・汀・漳・泉の四州が南唐領となったが、福州には李仁達（弘義）がおり、南唐はこれを羈縻するのみであった。その翌年威武節度使の李達（仁達）が南唐に攻められ、吳越に師を乞い、吳越王弘佐がこれに應じて福州を救い、南唐軍を破り、戍將鮑修讓を遣わしてこの地を守らせた。しかし李孺贇（仁達）が修讓と協調せず、修讓を殺して南唐に降伏せんとしたため謀が漏れて殺され、福州は吳越に屬することになった。時に後漢の高祖の天福十二年（九四七）十二月のことである。

註

① 五代史記注卷六十七下吳越世家末尾の原注には、錢鏐の國は、興ってより滅びるまで八十四年とあるが、吳越は錢鏐が後梁の太祖より吳越王に封ぜられた年より數えると滅びるまで七十二年存續したことになる。

② 五代史記卷六十職方考によると、吳越の領州は杭・越・蘇・湖・溫・台・明・處・衢・婺・睦・秀・福の十三州となっており、十國春秋卷一一二地理表下吳越の條に、西府杭州（錢塘・錢江・鹽官・餘杭・富春・桐廬・於潛・安國・新登・橫山・武康）安國衣錦軍・東府越州（會稽・山陰・諸暨・贈・餘姚・蕭山・上虞・新昌）蘇州（吳・長洲・崑山・常熟・吳江）湖州（烏程・德清・安吉・長興）溫州（永嘉・瑞安・平陽・樂清）台州（臨海・黃巖・台興・永安・寧海）明州（鄞・奉化・慈谿・象山・望海・翁山）處州（麗水・龍泉・遂昌・縉雲・青田・白龍）衢州（西安・江山・龍游・常山）婺州（金華・東陽・義烏・蘭溪・永康・武義・浦江）睦州（建德・壽昌・遂安・分水・青溪）秀州（嘉興・海鹽・華亭・崇德）とあり十二州一軍となっており、吳越備史卷四太平興國三年五月の條に「于是所部州十三。縣八十六。戶五十五萬七百。兵一十一萬五千。暨民籍倉庫盡獻于朝」とあり、續資治通鑑長編卷十九太平興國三年五月の條に「（俶）遂上表獻所管十三州一軍。（中略）凡得縣八十六。戶五十五萬六百八。兵十一萬五千三十六」とあり、吳越の滅んだときは十三州一軍であった。軍を除くと吳越は十三州の領州があった。州の下の括弧内は屬縣を示す。

③ 五代史記　卷六十八閩世家末尾の原注によると、「閩の滅びたのは晉の開運三年（九四六）で、王潮が光啓二年（八八六）泉州刺史になった年を閩の始めの年とすると、滅びるまでは六十一年存續したことになり、その國を奄有した景福元年（八九二）を始めの年とすると五十五年の存續となる」が、王審知が後梁の太祖より閩王に封ぜられてから王延政が南唐に滅ぼされるまでは、三十七年命脈を保ったことになる。

④ 五代史記卷六十職方考によると、閩の屬州は建・汀・漳・泉福の五州である。十國春秋卷一一二地理表下の閩の條に、「南都長樂府（福州）（閩・候官・長樂・連江・長溪・福清・古田・永泰・閩清・永貞・寧德）泉州（晉江・南安・莆田・仙遊・同安・清溪・永春・德化・長泰）建州（建安・邵武・浦城・建陽・松源・歸化・建寧）汀州（長汀・寧化）南州（漳浦・龍溪・龍巖）鏞州・劍州（南平・劍浦・富沙・尤溪・沙・順昌）の七州と見えている。五代史記注卷六十下職方考劍州の條に引く方輿勝覽に「王延政僭位於建州。國號大殷。以將樂縣爲鏞州」とあり、鏞州が置かれたのは後晉の出帝の天福八年（九四三）二月であるので、鏞州は閩の滅びるまで三年間存しただけであるため、これを除き、また劍州は南唐の李璟のとき置かれたので除くと、閩の領州は五州となる。

⑤ 宮崎市定博士「五代宋初の通貨問題」五一頁―五三頁參照。

⑥ 五代史記卷六十八閩世家には「延羲は審知の少子」とあるが、この少子は末子の意味ではなく、年少の子という意味であろう。

⑦ 日比野丈夫「唐宋時代に於ける福建の開發」（東洋史研究四卷三號）五頁參照。

⑧ 十國春秋卷七八吳越武肅王世家下に「天寶九年（貞明二年）。是歲王命子牙內先鋒都指揮使傅珣逆婦於閩。自是與閩通好」とあり、同卷九〇閩太祖世家には「貞明二年冬。王與吳越爲昏。吳越牙內先鋒指揮使錢傳珣來逆婦」とあるが、吳越備史卷一貞明二年の條には兩國通婚に關する記載がない。

⑨ 王繼昇・繼倫の吳越への亡命については、吳越備史卷一武肅王長興二年八月の條。五代史記注卷六十八閩世家の延翰・鱗の條。五國故事卷下（學浦類編所收）延禀の條。

⑩ 王審知の在位中、延翰・延禀不仲の理由については、十國春秋卷九八王延禀傳に「貞明四年。知建州軍州事。尋授刺史。會嗣王延翰命延禀來擇後宮。延禀復書不遜。遂有隙」とある。

⑪ 九國志卷十閩景宗の條。資治通鑑卷二八二後晉高祖紀天福四年七月の條。

⑫ 五代會要卷十一封建。

⑬ 九國志卷十閩景宗の條。五代史記注卷六十八閩世家延羲の條の注。資治通鑑卷二八二後晉高祖紀天福五年十一月の條。

⑭ 吳越備史卷三忠獻王開運元年春正月の條に「國建乃掌教令。尋拜丞相。每正事卽不逮者。鼎必極言之。天福中。建州之役。鼎指陳天文人事。累疏切諫。及師行。果不利」とあり、十國春秋卷八十六林鼎傳に「天福中。建州之役。鼎指陳天文人事。累疏切諫。王不用鼎言。卒無成功。人多鼎有先見云」と見えている。

⑮ 資治通鑑卷二八二後晉高祖紀天福五年四月・五月の條。吳越備史卷二文穆王天福五年秋七月の條に「我師敗于建陽。積雨乏糧故也」とある。

⑯ 資治通鑑卷二八二後晉高祖紀天福五年五月の條。

⑰ 五代會要卷十一封建。資治通鑑卷二八二後晉高祖紀天福五年十一月甲申の條。

⑱ 資治通鑑卷二八二後晉高祖紀天福六年六月の條。

⑲ 同右。

⑳ 同書天福六年七月の條。

㉑ 同書天福六年九月の條。

㉒ 同書天福六年十月の條。

㉓ 資治通鑑卷二八三後晉高祖紀天福七年正月の條。

㉔ 同書天福七年六月・七月の條。

㉕ 同書天福八年二月の條。

㉖ 同右。

㉗ 同書天福八年四月・五月の條。

㉘ 同書開運元年（實は天福九年）一月の條。

㉙ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運元年（實は天福九年）三月の條。九國志卷十閩許文稹の條。

㉚ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運元年（實は天福九年）四月の條には「朱文進遣使如唐。唐主囚其使。將伐之。會天暑疾疫而止」とあり、馬氏南唐書說をとっている。

㉛ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運元年八月の條。

㉜ 同右十月の條。

㉝ 同右十二月の條。
㉞ 同右。
㉟ 同右。
㊱ 同右。馬氏南唐書卷二、保大二年十二月の條。馬氏南唐書には王延政の遣わした統軍使は吳承祐とある。
㊲ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運元年十二月の條。
㊳ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運二年正月の條。九國志卷十閩黃仁諷の條。馬氏南唐書卷二によると、繼昌は延政の子とある。
㊴ ㊳の資治通鑑の條に同じ。
㊵ 査文徽が南唐主に救援軍を請うたのは馬氏南唐書卷二によると保大二年（九四四）十二月となっている。
㊶ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運二年二月の條。
㊷ 同右。三月の條。
㊸ 同右四月の條。九國志卷十閩黃仁諷の條。
㊹ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運二年五月丁巳の條。
㊺ 資治通鑑卷二八四後晉齊王紀開運二年五月の條。
㊻ 同右七月の條。
㊼ 王延政が南唐軍に降伏したのは、南唐軍が強力であったことによるのは勿論であるが、連年の内亂により、建州の民心が王延政から離れ、將士も戰いに倦んできたためである。夢溪筆談卷九、王延政の條によると、「かれの部將が罪せられんとして南唐に逃れ、査文徽の麾下に隷し、文徽が建州の延政を攻めたとき、この部將がこの役を主った」とある。これも延政の降伏を早めた一因となろう。
㊽ 資治通鑑卷二八五後晉齊王紀開運二年八月の條。
㊾ 同右九月の條。
㊿ 同右。
(51) 同右十月の條。馬氏南唐書卷十一王崇文傳に「初平建州。崇文鎭之。卽日安輯。人忘其亂」とあり、陸氏南唐書卷五王崇文傳に「建州初平。崇文安集之。民忘其亂」とある。
(52) 馬氏南唐書卷二嗣主書保大四年六月の條。
(53) 資治通鑑卷二八五後晉齊王紀開運三年六月の條。
(54) 同右八月の條。
(55) 善化門は十國春秋卷九十閩太祖世家天祐二年の條に「是歲築南北夾城。謂之南北月城。合大城而爲三。大城之門八。曰…善化門」とあり、福州の大城の一門である。
(56) 資治通鑑卷二八五後晉齊王紀開運三年九月の條。
(57) 同右十月の條。
(58) 同右。
(59) 同右。
(60) 同右十一月の條。
(61) 資治通鑑卷二八六後漢高祖紀天福十二年三月の條。
(62) 資治通鑑卷二八七後漢高祖紀天福十二年七月・十二月の條。

補註 註②の十國春秋によると、吳越の屬州は十二州であるが、同じ卷の閩の條には、南都長樂府（福州）の所に「南唐保大三年取福州。明年入吳越。」按吳越得福州以尤溪・德化隸福州。福州共領縣十三。乾祐元年二縣失於唐。仍領縣十一」とあり、吳越は開運三年（九四六）以後福州を領するので、十國春秋でも吳越の屬州は十三州となる。